「ほか」の諸用法と名詞句の多様性

宮　地　朝　子

1．はじめに

現代日本語の「ほか」には、「うち」「なか」の対義語としての「そと」にあたる空間的範囲外を表す自立した名詞用法から、否定述語と共起して反転的な限定を表す「しか」同様の助詞用法まで多様な意味機能を持つ。従来、このような「ほか」の多様性・多機能は、歴史・地理的な変化の結果として、また個々の用法は「名詞」「形式名詞」「形式副詞」「助詞」などおのおの別の文法的位置づけを得て記述把握されてきたが、そもそも「外」の意を表す名詞がなぜどのようにして多様な意味機能を持つに至ったか、その変化の過程や、多機能を支える条件、要因等については明らかとは言えない。

本稿の筆者も「ほか」について、助詞「しか」同様の限定用法獲得に注目した歴史的考察を行ったことがあるが（宮地2007a）、そこでは主に格助詞との前後接関係を基準とした観察に終始し、また当該用法獲得の時期の推定に主眼があった。本稿では、「ほか」の変化を「名詞「ほか」」の形式化・文法にかかわる意味機能の変化という観点から見直し、名詞用法での形式化、副詞句構成の様相と条件、さらには“助詞”化という変化を見直す。これにより、汎言語的に観察される「名詞の形式化と文法変化」の一類型として一般性の高い説明を試みる。

現代日本語のいわゆる助詞・助動詞とされる文法要素には、名詞由来形式の体系的な参与が認められる*1。古代語の助動詞「き・けり・つ・ぬ・たり・り・らし・べし・めり・なり・まほし・たし･･･」などの多くが動詞・形容詞などの用言由来と推定されているのに対し、現代語で助動詞と位置づけられる形式は「ものだ・ことだ・わけだ・はずだ・ようだ・そうだ・ところだ･･･」など、「形式名詞＋ダ」型が多くを占める。また、助詞においても、接続助詞（とき・ところ・ため・分・際・場合･･･）、とりたて助詞（ばかり・だけ・くらい・ほど・きり･･･）などにおいて名詞由来の要素がすみわけをしながら参画している様相が顕著に認められる。このような

*1 活用語由来の助詞・助動詞類も日本語史においては数多く生み出されており（「かもしれない」「にちがいない」「ている」「にたいして」「について」「において」「たら」「なら」「けれども」等）、形態変化を伴う接辞化までが多く観察される。体言と用言が汎言語的に二大品詞であることからすれば、その一翼に注目する立場ということになる。ただ、本稿の名詞に注目した問題設定は、準体句の存在した古代語と名詞句において主名詞を必須とする現代語の違いをとらえ、古代語の形式的な名詞（や活用語連体形＝準体句）による従属句の構成（例えば「ものを」「ものの」「ほどに」）や述語表現（例えば「ものなり」）の文法機能、また現代日本語の「助詞」「助動詞」認定の再考につながる意味で文法化現象の把握のみを目的とするものではない。

名詞類の機能語における体系的参与は、日本語史においてこれを条件付けた構造的な問題として位置づけることができるだろう。個々の名詞の文法変化についてその条件や制約、類型を整理することは、文法化の個別的な事例の追究のみならず、動態としての日本語の構造的解明につながるものである。

このような問題意識に則り、本稿では、「ほか」の多様性を名詞の形式化・文法化の問題として取り上げる。名詞の範疇の多様性にせまるという点で、本稿の結論は共時的な多機能の説明にも示唆を与え、一般言語学的にも有効な知見を提示することになるだろう。

1.1.「ほか」の諸用法

まずは「ほか」の諸用法を概観しよう。

用法（Ⅰ）【範囲外の具体的地点＝ソト】

1）a　葦垣の保加にも君がより立たし恋ひけれこそば夢に見えけれ

（万葉集17／3977）

用法（Ⅱ）【範囲外の要素】

2）a　みる人もなき山里の桜花　ほかのちりなむ後ぞさかまし（古今集・春上68）

b　大將、御迎に參り給ふ。左大殿、右大殿、それよりほかはある限り御供に仕うまつる。（宇津保物語・三）

用法（Ⅲ）【時間・空間・概念の範囲外】ヨソ・ホカ

3）a　さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへをひやらむとす。（伊勢物語）

b　見すまじき人に、外（ほか）へ持ていく文見せたる。（枕草子／148）

c「心にくゝはあれど、一人有女には、思ひの外（ほか）なる事も有。」

（落窪物語）

（Ⅰ）は上代から見られ、「ほか」の最も根源的な用法といえる*2。（Ⅱ）は、（Ⅰ）範囲外の地点からヒト・モノといった個物の指示への拡張、（Ⅲ）は空間的な範囲外から時間的、概念的範囲外への拡張である。（Ⅲ）のうち、3)b「思いの外」は（Ⅰ）の用法が、容器のメタファーによって「心」や「思い」に拡張したものであり、「思いの外・以ての外・ことの外・心｛の／より｝外・この世の外・思はざる外」など叙述名詞句として慣用化していく。述語に立ってナリ型形容動詞としても用いられる。

次の用法（Ⅳ)aの「ほか」は、用法（Ⅲ）と同じく非指示的に「範囲外」を指すものである

*2（Ⅱ)(Ⅲ)、また（Ⅳ)a・bに当たる用法が日本書紀・懐風藻などにあるが、「自餘」「以外」「此外」などに当てられた後代の訓読であり、仮名書きの確例としては（Ⅰ)(Ⅱ）の用法に限られる。

が、非存在文を主とした否定述語文に偏り「xよりほか（に・の）Xなし（x∈X*3)」の型を典型として、「(より・の）ほか」句が付加的な【除外】句を構成するもので用法（Ⅲ）と区別して立項できる。

用法（Ⅳ）a【除外・古代語】

4）ひぐらしのなく山ざとの夕ぐれは風よりほかにとふ人もなし（古今和歌集/205）

現代語には（Ⅳ）からの拡張と位置づけられる用法（Ⅳ)b（Ⅴ)a・b（Ⅵ）があり、いずれも中世以降獲得されたものである*4。

用法（Ⅳ）にあたる「x｛より・の｝ほかに･･･否定述語文」の類型も現代語に存するが*5、(Ⅳ)bは「ほか」の後ろに「に・は」などが後接しない助詞なし（以下「ϕ」で示す）のパターン「xのほかϕ」が可能であること（5a)、ホカ句で提示（除外）される要素xをメンバーとする集合Xに相当するホスト名詞句の明示が必須でないこと（5b)*6、「ほか」句とホスト句のかきまぜが可能であること（5c）など、文法的振る舞いは（Ⅳ）とは異なり、むしろ「～以外」句や「しか」句に近い（角道1984、江口2000)*7。

用法（Ⅳ）b【除外・現代語】

5）a　山田のほか｛ϕ・に・の｝学生は来なかった。
　　b　山田のほか｛ϕ・に｝来なかった。
　　c'　学生は　山田のほかϕ　来なかった。

そして、次の用法（Ⅴ)a・bも、(Ⅳ)b同様「～ほかϕ」の形式をとり、中世以降の用法である点、(Ⅳ)bに共通するが、江口2000の観察によると、(Ⅴ)a累加の「ほか」は、ホスト句を必須とする、ホスト句とのかき混ぜが不可能、肯定述語・否定述語ともとり極性に制限がない、「AのほかのB」型が取れない、節のテンスにル形タ形とも許すなどの相違点があり、同格句の一種と位置づけられるという。江口2000では（Ⅴ)bについては言及がないが、「xほか」でxと同類の要素の集合を代表して例示する点で、(Ⅴ)a累加に近い用法と位置づけられる。

用法（Ⅴ）a【累加】

6）a　山田のほか｛に・ϕ｝、鈴木・山本がきた。

---

*3 以下、江口2000に従いX句を「ホスト句」と呼ぶ。
*4 用法（Ⅳ)a（Ⅵ）について文献上確認できる歴史的変化過程の詳細は、宮地2007a参照。
*5 古代語・文語では圧倒的に「～よりほかに」が多く、現代語では「～のほかに」に偏る。
*6 (Ⅳ)aではホスト名詞句Xの明示が構造上必須である。(宮地2007a)
*7 角道1984・江口2000は、現代語「ほか」を詳細に観察分析するが、主に用法（Ⅴ)a累加（Ⅳ)b除外を対象とする。

用法（Ⅴ）b【例示】[*8]

7） 山田太郎ほかの編著書を買った。

そして近世以降、用法（Ⅵ）として「しか」同様の反転的限定用法が観察できる。

用法（Ⅵ）【シカ的限定】

8） 山田にほか会わなかった。（＝山田にしか会わなかった）

用法（Ⅵ）は、次の用例9）に見るように主に方言で観察されるものだが、西日本を中心として東北などかなり広範囲での分布が確認できる。また、中央語として上方語の影響を色濃く受けた近代標準口語の範疇では10）のような記述があり、文語的文体では用例も皆無ではない。

9） a「俺ほか知らない」岩手県上閉伊郡
b「二かごばかほか（ぐらいしか）よー摘まなんだの」岐阜県
c「一つほかない」 三重県北牟婁郡・度会郡・大阪府大阪市・泉北郡・兵庫県神戸市・奈良県・和歌山県・和歌山市
d「千円ほか持っとらん」山口県・徳島県美馬郡・香川県

（『日本国語大辞典』第2版「ほか」項・方言欄より）

10） a 五人ほか来ぬ。　b この店には古いものほかない。
c 近いほか見えぬ。　d 取られるほかない。
e 南えほか向かぬ。　f 筆でほか書かれぬ。
g 遅くほか行かれぬ。　h 僅かほか残って居ない。

（a-h『日本口語法講義』1922より）

（Ⅰ）～（Ⅵ）にみる「ほか」の多様性は、歴史的地理的な変化の結果であり、最大限の広がりをとらえたものである。（Ⅰ）が「そと」に取って代わられ[*9]、（Ⅵ）が主に方言で観察されるなど用法の中核・重心に変化は認められるものの、少なくとも（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）a・b（Ⅴ）は現代

[*8]「例示」用法は、用法分類の中では（Ⅴ）aに最も近いものの、（Ⅴ）aとは異なり上接名詞に直接接続可能、「NP1のNP2」のNP1位置に出現可能、用例がほぼ書き言葉文体に限られるといった特徴的な分布を示す。また筆者の現在までの調査では文献上出現過程をたどることができない。

[*9] 中世末～近世初期の様相を反映する資料では、用法（Ⅰ）の衰退、（Ⅲ）への偏りが顕著である。用法（Ⅰ）の衰退について、「御伽草子」類では「そと」意の用法（Ⅰ）の例が、「ほか」44例中1例に対し「そと」8例、虎明本狂言集では「ほか」100例中4例に対し「そと」14例。また（Ⅲ）への偏りについて、御伽草子類は「このほか・そのほか」14 「おもひのほか」2 「ことのほか」7 「所存のほか」1 「以てのほか」1、虎明本「ほか」例内訳「このほか・そのほか」11 「ことのほか」68 「おもひのほか」7 「以てのほか」7例が見られる。

日本語の共時態においても観察され、多機能の様相を呈しているといえる。本稿では、（Ⅰ）～（Ⅵ）までの多様性を視野に入れ、この多機能の様相を名詞「ほか」の変化として整理する。

2．どこまで「名詞」か

2.1．完全に名詞を脱した用法（Ⅵ）「シカ的限定」

主に方言で観察される（Ⅵ）については、上例9）10）に見るように格助詞・副助詞への後接、形容詞連用形への接続が可能で、否定述語との拘束関係も含め、現代語「しか」と同然である。夙に山田1922ではこのような「しか」「ほか」の構文的ふるまいが、「は」「も」や古代語の係助詞類に同じことを踏まえ「係助詞」と位置づけている。整理して示すと以下の通りである。用法（Ⅵ）においては完全に名詞を脱して文法化した接辞（「助詞」）と位置づけられるだろう。

11）a　格助詞・副助詞との前後接･･･必ず後接、他助詞の前接は許さない

×　君しかに頼まない　　○　君にしか　頼まない。

○　一品だけしか頼まない　　×　一品しかだけ頼まない。

b　ハ・モ（他の係助詞）と承接しない

×　チャンスは　今回　しかは　ない。　　×　チャンスは今回はしか　ない。

×　100円　しかも　ない。　　×　100円　もしか　ない。

c　形容詞連用形に･･･後接可能

○　6割近くしか残っていない。

d　非名詞性；「の」「だ（で、に）」の前に･･･来られない

×　100円しかの財布　　×　この財布の中は100円しかだ。

e　名詞節内に入る

○　［［私一人しかいない］時］に大勢客が来た。

2.2．用法（Ⅰ）−（Ⅴ）はどこまで名詞か

では、用法（Ⅰ）～（Ⅴ）はどうだろうか。一般に、名詞であれば、以下のア）～エ）を満たす。

ア）格に立つ（格助詞に前接する）

イ）「～だ」の形で述語に立つ

ウ）［NP1のNP2］名詞NP2の修飾要素NP1として「の」を介する

エ）［NP1のNP2］名詞句の主要部NP2になる

2.2.1 ホカ（Ⅰ)−(Ⅴ）の名詞らしさ

ア）格に立つ（格助詞に前接する）

「ほか」は（Ⅰ）はもちろんメタファーによる（Ⅱ）（Ⅲ）において、ニ格・カラ格・ヘ格といった、場所・起点・着点などの格に立ちやすい。また範囲外の付加句を構成する（Ⅳ)aも「xよりほかに」の形で定型化して制約を保持している。個物を指示する（Ⅱ）（モノ・ヒトへの拡張)、(Ⅴ)b例示用法では対象ヲ格なども可能で、空間的場所の制約から離れたことが確認ができる。いずれにしても、すべての用法が満たしている。

12) a「〈十五夜〉は此方に、その他(ほか)をば宮の御方に」(宇津保物語・三)･･･(Ⅱ)
b 研修団が文学部ほかを見学した。･･･(Ⅴ)b

イ)「～だ」の形で述語に立つ

用法（Ⅰ）(Ⅱ)、また（Ⅲ）(Ⅴ)bで指示的解釈が可能な場合は、一般の指示的名詞句同様、(倒置）指定文・同定文の述語に立つことができる。また、用法（Ⅲ）は、「範囲外」の非指示的解釈を示すため、属性を示しやすく、自ずと述語用法が多い。(Ⅳ)(Ⅳ)b (Ⅴ)aは基本的に従属句を構成するもので、述語用法は持たない。

13) a 今日の見学先は徳川美術館のほかだ。･･･(Ⅱ)
b 今日の見学先は徳川美術館ほかだ。 ･･･(Ⅴ)b*10
c 中止するなんて以ての外だ。 ･･･(Ⅲ)

ウ)［NP1のNP2］修飾要素NP1として「の」に前接する

(Ⅴ)a累加用法を除くすべての「ほか」が満たす*11。名詞の範疇で多様性を把握する立場の大きな根拠の一つとなる現象である。

14) a ほかの人･･･(Ⅱ)
b 山田のほかの学生･･･(Ⅲ)
c 徳川美術館ほかの見学先･･･(Ⅴ)b
d 林のほかの学生は来なかった。<林のほか {に・ϕ} 学生は来なかった･･･(Ⅳ)(Ⅳ)b

*10 (Ⅱ)(Ⅴ)bでは解釈は異なる。(Ⅱ)では「徳川美術館」は今日の見学先に含まれず（13a)、(Ⅴ)bでは今日の見学先のメインである（13b)。次注11も参照。

*11 (Ⅴ）累加「太郎のほか、次郎が来た」を「太郎のほかの次郎が来た」とは言えない。江口2000では、角道1984の記述を元に「「AのほかのB」では必ず「A∈B」という関係でなければならず、「A、B∈C」(Cは上位集合）という場合には「ほかの」の構文になれないという事実がある。〇太郎のほかの学生／＊太郎のほかの次郎」と述べる。(Ⅴ）累加「Aのほか、Bは」のA,Bは常に「A、B∈C」の関係となる。

エ）［NP1のNP2］･･･「NP1の」を受けるNP2の位置に立つ

この点もすべての用法が満たす。用法（Ⅰ）（Ⅱ）は、必ずしも名詞修飾節を必須としないが、修飾限定を受ける場合は「NP1の」による。用法（Ⅲ）、（Ⅳ）a・b、（Ⅴ）a・bは基本的に名詞修飾節を必須とし、この環境に立つものである。すべての用法がこの条件を満たすことは、「ほか」の諸用法が構文的に名詞であることの現れであるが、と同時に、特に名詞修飾節を必須とする用法（Ⅲ）、（Ⅳ）a・b、（Ⅴ）a・bについては、形式化した名詞として機能していることを示す現象である。（Ⅴ）bは「の」を介しないが、NP1を必須とする点で、同じく形式化を示しているといえる。これにより、「形式名詞」という範疇を別に立てる立場もあるが、「ほか」の場合、古代語の段階でも（Ⅰ）～（Ⅳ）aまでが共存し、自立的な用法と形式的な用法とに強い連続性が認められ、近代語以降の（Ⅳ）b、（Ⅴ）a、（Ⅴ）bについても、名詞としての文法的振る舞いが認められることから、「形式化」も名詞「ほか」の多様性とみることができる。

15）a ［ご意見のほか］に多数のご希望が寄せられました。･･･（Ⅴ）a
　　b ［山田太郎ほか］の編著を買う。･･･（Ⅴ）b

2.2.2 ホカ（Ⅰ）−（Ⅴ）の「名詞らしくなさ」

前節では「名詞らしさ」を確認したが、「ほか」の諸用法には「名詞らしくなさ」も観察できる。

ア）’格にも立つが･･･格助詞を後接させずに副詞句にもなる

範囲外を示す非指示的な用法（Ⅲ）は属性解釈につながり、情態、量、程度を表す副詞句を構成する。その際、「ほかに」の形の「連用修飾」も可能だが、後ろに助詞なしで「ほか」句自身副詞句になることができる。また、近代語に特徴的で基本的に従属句を構成する（Ⅳ）bの新しい除外用法、（Ⅴ）a累加用法は、他助詞を後接させない特徴において「しか」と共通するものであった。

16）a ｛おもいのほかφ／ことのほかφ｝　大きかった。･･･（Ⅲ）
　　b 君のほかφ　適任者はいない。　･･･（Ⅳ）b【除外】
　　c 君のほかφ　適任者は三人いる。　･･･（Ⅴ）a【累加】

このような振る舞いから、「おもいのほか」などは語彙化した副詞と記述されることも多く、奥津1986では、このような「ほか」同様の振るまいを見せる「だけ」「ばかり」「くらい」「ほど」などの数量・程度用法を「形式副詞」と位置づけている。

イ)’述語用法には制限がある（できる場合が希）

先にイ）で述語に立つ用例を見たが、実際には「ほか」句が述語に立つのは、属性解釈が可能な用法（Ⅲ）に制限される。指示が明確な（Ⅰ）（Ⅱ）の場合、固有名詞などと同じくガ指定文や同定文の述語に立つこともできそうだが、用例は少ない。用法（Ⅲ）も、17a）のように不定の集合を指す場合は述語に立ちにくく、17b）のようにホスト句を示して指示を明確にした場合に自然になるのとは対照的である。

17）a ？ 彼らは、山田のほかだ。 ･･･用法（Ⅲ）
b ○ 彼らは、山田のほかの出席者だ ･･･用法（Ⅲ）＋ホスト句
c ??（出席者のうち）山田は 鈴木・山本のほかだ。･･･用法（Ⅴ）a

ウ)’［NP1のNP2］で･･･「の」を必須としない用法がある

これは、（Ⅴ）bに限られるが、名詞の中でも同格構造や程度を表す形式名詞に特徴的な振る舞いである。

18）山田太郎ほかの著作を参照した。（≠山田太郎のほか）

2.3. 名詞らしくない名詞とは

「ほか」の用法（Ⅰ）～（Ⅴ）は、文中での振る舞いが「名詞」である一方、用法ごとに制限や形式化、名詞を離れて副詞と認める根拠となるような側面も観察された。しかし、名詞研究の進展に伴って、上で見た非名詞性は、名詞の多様性のなかで説明される現象でもあることが分かる。

2.3.1 名詞らしくない名詞（1）「尺度」を表し遊離数量詞句を構成する名詞→(Ⅳ)b

例えば、ア)’のように、名詞でありかつそれ自身副詞句を構成するものは少なくない。

時間名詞が特にダイクティックな語彙で「に」を要しないことはよく知られており（19)、時間以外にも、20）のように、数量・程度・時間・頻度・範囲･･･などのスケール上の「値」を表す名詞（＝値名詞）は助詞なしで副詞的に働くことができる。（江口2000）

19）注文した商品は、今日 {φ／×に} 届く予定です。
20）a 焼き鳥を たくさん 注文した。（「注文した」数量／「焼き鳥」の数量）
b 以前に比べて 少し 上達した。（「上達」の程度／「上達した」程度）
c 長時間かけて学校に通っている。（「通学」の時間／「かける」時間量）
d あの人には {数回／毎月} 会っている。（「面会」の頻度／「会っている」頻度）

20）のような自立的な値名詞は、自立的である一方関係節化することができないため（×「焼き鳥を注文したたくさん」「×以前に比べて上達した少し」、また以下の例文21b））、量の副詞などとして記述されることも多いが、形式化した値名詞による名詞句の場合には、関係節化も可能である（22b）。（副詞の関係節化、江口2002）。

21）a ○ 山田君はたくさん食べた。
　b ×［［山田君が食べた］たくさん］｛φ／を｝、ぼくも食べてみせる。
22）a　　山田君は大量に食べた。（△山田君は量、食べた。（量＝「大量」の意ならok））
　b ○［［山田君が食べた］量］｛φ／を｝、ぼくも食べて見せる。

例文22）の「量」は、形態的には名詞でも、修飾句を伴うことで抽象化・形式化し、項名詞句としても働き、「尺度」を表して副詞用法をも示す。一般に、副詞は関係節化できないとされるが、「太郎はゆっくり食べた。→太郎が食べた速度」「太郎が1kg食べた→太郎が食べた分」など、範疇的な名詞、なかでも形式名詞によれば、副詞が示す値の関係節化は可能なのである。

さらにこのような名詞句は、「遊離数量詞」と分布が共通する（江口2002）。

23）a［三杯のご飯］を食べた。
　b＝ご飯三杯を　食べた。（項N「ご飯」の「数」）
　c＝ご飯を三杯　食べた。（述語V「食べた」の「量」）
24）a［三杯分だけのご飯］を炊いた。
　b＝ご飯　三杯分だけを炊いた。（項N「ご飯」の「数（量）」）
　c＝ご飯を三杯分だけ　炊いた。（述語V「炊いた」の「量」）

江口2007では、このような副詞化した値名詞句と遊離数量詞句との分布の並行性に注目し、遊離数量詞句としての再分析が、主名詞要素の助詞化の契機となるとの分析を提示している。

「だけ・ばかり」などは、歴史地理的用法を概観しても、程度用法を経由して限定のとりたて用法、さらに助詞化を果たしていることが明らかであり、値名詞としての尺度解釈から、遊離数量詞段階を経たとする江口2007の推定は説明力を持つ。

程度・数量を表す値名詞の遊離数量詞構文への再解釈は、文脈上、「Nの属性＝述語」の解釈が成り立つ文脈でのみ成立する。例えば23）に関連して「三杯のご飯を一杯（分）食べた。」が言えることからすれば、常に「Nの属性＝述語」の動作量ではありえない。この点について、「たけ（丈）＞だけ」の変化過程が傍証となるだろう。「たけ」は存在詞「あり」の修飾による尺度名詞句といえる「ありたけ」の形を経て、程度・限定の「だけ」用法を獲得していくことが歴史的に確かめられる（宮地刊行予定a参照）。その変化過程では、「ありたけの道具（N道具の数量）」

「道具（を）ありたけ渡す（述語「渡す」の程度量）」の解釈が成り立つ25a）が、「ありたけの息（息の量）」と「ありたけしゃべる（述語「しゃべる」の量）」が一致しない文脈にもかかわらず「息のありたけ」で副詞句を構成する25b）のような用例に先行する。25a）のような条件で再分析を経た遊離数量詞句は、あくまで構文上名詞であるために主名詞としてかつ副詞句を構成し、参与名詞Nの属性とは異なる事態量・程度・値についても言及できるようになると考えられる。ここに名詞としての機能変化を見ることができる。

25）a ありたけの道具を渡。（1698年；新色五卷書）
b 晝休から泊まで。葭原雀の鳴くやうに息の有りたけしゃべって。
（1708年；丹波與作待夜の小室節）

さらに、江口2007では、程度用法を持たない点で「だけ・ばかり」タイプとは異なるものの、「ほか」の場合も範囲（外）という尺度を表して、「そもそも遊離数量詞段階にあ」り、ゆえに付加的な除外句の構成が可能であるとする。江口2007の指摘また江口2000の「のほかϕ」句に対する観察の通り、現代語「ほか」の用法（Ⅳ)bにおいては遊離数量詞句と同様の分布が確認でき*[12]、「ほか」が尺度解釈を持つ名詞（遊離数量詞句）として機能していると見ることができる。

26）a ［自己破産のほかの方法］はない。
b 自己破産のほか、方法はない。
c 方法は自己破産のほか {に・ϕ} ない。

ただし、古代語で除外句を構成する類型（Ⅳ)aでは、さきに見たように①後ろに助詞なしで出現しない、②ホスト句とのかきまぜ例が観察されないなど、必ずしも数量詞句と分布を同じくしない。（Ⅳ)aの類型の「ほか」は、用法（Ⅲ）が非存在文という特定の類型で現れるものである。（Ⅲ）の「ほか」はすでに修飾句を必須として形式化し、範囲外を表す非指示的な名詞といえるが、江口2007のいう遊離数量詞段階にはなく、つまり尺度名詞としては確立していないと考えられる。（Ⅳ)aまでが非指示的な名詞、（Ⅳ)bがさらに意味機能を変化（特化）させた尺度名詞としての遊離数量詞段階の「ほか」句と整理できるだろう。また、宮地2007では（Ⅳ)aから（Ⅳ)bへの変化を、（Ⅳ)aの環境、すなわち非存在文での再分析と見ている。ここでの考察と併せれば、この「ほか」の名詞としての特性の変化は、非存在文での再分析に伴って生じたものと位置づけられる*[13]。

*[12]江口2000により「ほかϕ」除外解釈の示す特徴をまとめると以下の通りである。①述語の極性：否定のみ、②ホストとの語順制限：なし、③ホストの存在：不要、④ホストの種類：普通名詞のみ、⑤先行節のテンス：ル形のみ。なお、後ろに助詞なしの「ほかϕ」の形を取れることそのものも、（Ⅳ)b除外「ほか」と遊離数量詞句、「しか」との共通点である。

*[13]宮地2007aでは、否定の作用域外の主題文の指定部位置として、係助詞類の統語的位置への再分析とした。片岡・

2.3.2 名詞らしくない名詞（2）同格句を構成する名詞→(Ⅴ)

では同じく歴史的に近代語以降の確立とされる（Ⅴ)a累加、(Ⅴ)b例示用法はどのような名詞として位置づけられるだろうか。後ろに助詞なしの型が取れることや、「AのほかのB」の形式を取れないこと、係助詞モとの振る舞いの平衡性、少なくとも近世以降の出現ということから、(Ⅳ)bとしての尺度名詞化後の用法との推定が自然である。

歴史上、累加に近い解釈ができる用例は、27）のように用法（Ⅲ）のなかの「指示詞＋ほか」の用例に偏るが、「～のほか又」といった類型が散見される点で、(Ⅳ)a～(Ⅳ)bへの変化と同じ傾向を示す。28a)のような「｛この・その｝ほか」による累加表現を経て、28b)のような（Ⅴ)a累加の用法が確認できるのは、管見の調査では中世末期～近世初期である。

27）a　このほかのをばべちにしるしをく（とはずがたり巻三）（こ＝直前掲出の特定の歌）
　　b　そのほか又かやうの所へ　くしありく人もなきにしもあらじ（とはずがたり巻四）
28）a　小姓、若党、道具持、そのほか、家来の者までも、みなゝゝ入れ申す所など、仮屋なりとも御建て候へよ。その上、座敷の飾り物、何々御こしらへをき候や。御馳走の品々を……（御伽草子「猿源氏草紙」）
　　b　それ人のもてあそびには、琴碁書画の外に、茶の湯鞠楊弓謡など聞よし
（本朝二十不孝）

この過程については文献データからの補強が必要であり、稿を改めて述べたいが、用法（Ⅴ)aでは（Ⅳ)bとの共通性が歴史的にも統語的振る舞いにおいても様々に認められること、さらに(Ⅳ)bより広い関係節を採ることなどからより形式化が進んだ名詞[*14]と位置づけられるだろう。

再び江口2000の観察をふり返ると、(Ⅴ)a累加句について、名詞句内部にあって名詞句の先頭に位置しなければならない点、「の」なしにホストに関わることができる点、またホスト句との間に音韻的句境界（ポーズ）がある点などから27a・b）のような不定的同格句との共通性によって「要素を挙げながら集合を作っていく」（江口2000）同格句の一種と見なしている。

29）a　ウィスキーとかジンとか、アルコール度の高い酒を飲んだ。
　　b　ウィスキーやジンなど、アルコール度の高い酒を飲んだ。

宮地（2009）では、統語論の理論的枠組みに従い、シカ句や誰モ何モ句のなどの従来係助詞やとりたてとされてきた句の統語的位置を、述部とLFで姉妹関係を持つ叙述を構成する主語位置とした。なお、(Ⅴ)aのような累加の同格句についても同じ統語位置にある可能性がある。また、否定文・非存在文環境での再分析による文法変化については、「だに」（衣畑2005）「筈＞はず（だ）」（宮地2007b）など類例が挙げられる（宮地印刷中b）。

[*14]もちろんこの段階の「ほか」を接辞と位置づけることもできる。名詞としての構文的特徴は文法化の過程に見られる制約の保持とも言える。ただ、本稿では「ほか」が当該名詞句の主要部をなすことから、西山2003などの考え方に従い、「ほか」の諸用法を構文的位置づけに連動する名詞句の意味機能の違いによって説明する「名詞句の文法」という立場を採る。

不定同格句は、意味上、ホスト句とともに構成する集合に帰属する「変項」を含む。名詞句の意味機能を詳細に検討する西山2003では、このような変項を含む非指示的名詞句を「変項名詞句」と呼ぶ。たとえば、変項名詞句「洋子が好きな作曲家」は、「洋子は作曲家xが好きだ」を意味し、文脈によって特定の作曲家、例えばモーツァルトも、複数の作曲家も、好きな作曲が画存在するという仮定で不定的な存在量化解釈の集合を指すこともできる。(V)a・bが示す累加・例示、不定同格句も、変項を含むという点で共通であり、変項名詞句がホスト句と関係づけられる場合、29)に並行的な30)のような同格構造を採ることも興味深い。さらに考察を要するが、(V)の「ほか」句は変項名詞句として位置づけられる可能性があるだろう。

30) 洋子が好きな作曲家、モーツァルトのCDが売れに売れている。

なお、要素を挙げながら集合を作っていくということで同じ(V)b例示の構文的特徴はその形式化の過程において、興味深い特徴を示す。唯一(V)bのみの、「の」なしでの上接名詞への接続である。このような接続は、名詞の中で、尺度を示す値名詞であり程度用法を持つ「だけ・ほど・分・・・」等、さらに数量詞に特徴的なものである。

31) a 背丈(≒背の長け)/受講生だけプリントを用意する(≠受講生のだけ)
b {これ・それ・あれ}{だけ・ほど・くらい・ばかり}(≠この・その・あの{だけ・ほど・くらい・ばかり})
c 木星ほど(≠木星のほど)
d 太郎分(≒太郎の分)

32) a 本10冊
b これ一本

「ほか」が31b)のように指示詞に接続する場合は用法(Ⅲ)としての「{この・その}ほか」である。この点でも、上接名詞に直接接続する(V)bは、用法(Ⅲ)「範囲外」から、尺度上のある種の値を表す値名詞にあたる段階を経て遊離数量詞段階に入った後のものと、推定できる。名詞一般が普通は「この・その・あの+名詞」という接続をするのに対し、スケール名詞(概数量用法)は形態的に例外なく「これ・それ・あれ+スケール名詞」という接続を示す*15。助詞・接辞とされる統語的位置づけへの再分析のしやすさにつながっている。この点についても文献データからの補強を改めて提示したい。

*15 江口2007、注17に指摘がある。

2.3.3 名詞らしくない名詞（3）――「領域」によって断片を指示する名詞

ここまで、「ほか」の諸用法について、（Ⅵ）を除く（Ⅰ）～（Ⅴ）までがやはり構文上「名詞」であること、その一方で、名詞としての意味機能が異なることを見てきた。この考え方は、西山佑司2003・2007で展開される「名詞句の文法」という考え方に則ったものである。

同じ「名詞（句）」の範疇であっても、文中で果たす意味機能は一様でなく、述語に立ちやすい名詞や、項になりやすい名詞、固有名詞のように指示物が常に一定の名詞もあれば、集合名詞、抽象名詞のように語彙的意味から指示対象が明確でなく、文脈によって解釈の決まる名詞もある。従来、名詞の下位分類は特に性数格の一致のある言語、冠詞を持つ言語において盛んに行われてきたが、形態上の明確な文法現象を持たない日本語では、名詞（句）の意味特性が文法現象に関与するという見方に欠け、名詞論は盛んではなかった。しかし、同じ「小学生」という名詞であっても、措定文の述語に立つ33a）では属性を表し、動作主格に立つ33b）では特定の人物を指示する。

33）a　太郎は小学生だ。（小学生＝属性；非指示的・叙述名詞句）
　　b　小学生が目の前で転んだ。

西山（2003、2007）では、「NP1のNP2」構造や名詞述語文をはじめ、変化文、存在文、潜伏疑問文などに出現する名詞句の振る舞いから、名詞句が文中で果たす多様な意味機能を抽出し、その名詞句の意味機能に注目した「名詞句の文法」を展開している。西山（2003、2007）によれば、名詞句は大きく指示的名詞句と非指示的名詞句にわかれ、非指示的名詞句のなかをさらに叙述名詞句、変項名詞句などにわけることができる。名詞句の意味機能は文中の位置に連動し「小学生」のような一般名詞は、語彙によっては意味機能に制限もあるが、措定文の述語に立つ名詞は、非指示的名詞句として属性解釈を示す「叙述名詞」といえる。

ここまで見てきたように、「ほか」の用法も、名詞としての指示性を中心とした意味機能の違いとして把握でき、これによって名詞でありかつ多様な用法を示すことが説明できた。

（Ⅰ）（Ⅱ）は、指示性のある名詞、（Ⅲ）～（Ⅴ）は非指示的名詞（句を構成する形式名詞）と位置づけられる。さらに、（Ⅲ）は叙述名詞、（Ⅳ）はスケール解釈を示す値名詞（Ⅳ)aから遊離数量詞（Ⅳ)b、（Ⅴ）はさらに形式化した名詞と考えた。

（Ⅳ)b（Ⅴ）については、接辞、助詞、形式副詞という位置づけもあるように、名詞とする説明にはさまざまな側面からの補強論証が必要であろう。西山2007でも、「名詞句の意味機能に注意を払うことは、ある種の副詞（「まだ」「ずっと」）、とりたて助詞（「も」「だけ」）、数量詞などの働きを正しく規定するためにも不可欠である」と述べるものの、名詞由来の副詞や数量詞、取り立て助詞自体を「名詞」と見るものではない。ただ、従来多くの研究で指摘があるように、例えば“とりたて助詞”としての「だけ」の用法が、その由来する名詞としての用法と連続性を持

ち、截然と線引きできないことが明らかであるとすれば、また、2節の検討で見た「値名詞」類のように、名詞であって副詞句を構成する名詞が少なからずあることを踏まえれば、「名詞句の文法」は、すべての形式名詞句に、また助詞化・接辞化の認められる一部の名詞由来要素にも、援用可能であると考える。多様な用法や機能変化は、上接する名詞や、主要部たる名詞の意味機能の組み合わせによって発現し、文脈による指示の曖昧性等によって変化すると見るのである。

本稿の最後に、「形式化した名詞」による句の意味機能について、どのような位置づけが考えられるか、西山2003の記述から糸口を提示しておこう。

西山2003では、［NP1のNP2］の解釈を、そのNP1、NP2の意味機能によって5つに分けて説明している。

34）A）太郎の車 ･･･（NP1とNP2の関係R）
B）学生の太郎「＝太郎は学生だ。」･･･（NP1；叙述名詞、NP2；指示的名詞）
C）オリンピック当時の洋子 ･･･（NP1；時空間で指示的名詞NP2の断片を指示）
D）源氏物語の作者 ･･･（NP2；非飽和／変項名詞、NP1；変数）
E）太郎の事故 ･･･（NP2；行為名詞、NP1；項）

従来、この5種は、A；属格の「の」、B；同格の「の」、E；主格の「の」など、「の」の意味機能によって説明されてきたが、西山2003では、「の」は名詞と名詞を関係づけるのみで、「NP1のNP2」の解釈は、これを構成する名詞句NP1、NP2の意味機能、34）に挙げるように、「指示的名詞句」「叙述名詞句」「非飽和名詞句」「変項名詞句」「行為名詞句」といった名詞句の意味機能の多様性が決定づけているという。

ここでC）のNP1に注目しよう。本稿で取り上げた「ほか」をはじめとして、数量・程度・範囲・頻度・回数などといった範疇的意味を示す（形式）名詞の作る句は、C）のNP1の特徴と重なる点が多い。

西山2003では、C）のNP1は①「時間・空間などの領域（NP1）での、NP2の「断片」を指示するための「基準」であり（35a）、②副詞句として「も」NP2を修飾可能で（35b）、③文脈上NP2が類推可能ならばNP1でNP2を指示可能である（35c）とされる。

35）a ［オリンピック当時の洋子］は痩せていた。
b オリンピック当時、洋子は痩せていた。
c （洋子について）オリンピック当時は痩せていた。

しかし、時・空間に限らず、NP2の「断片」の指示は、さまざまな領域、すなわち範疇的意味において可能なのではないか。とすれば、様々な範疇的意味を持つ形式名詞句においても、35a-c）

のような振る舞いが可能であると予測でき、果たして「だけ」句「ほか」句では同様の振る舞いが確認できる。

36）a ［食べられるだけのケーキNP2］は用意した。
　b　食べられるだけ、ケーキは用意した。
　c （ケーキについて）食べられるだけは用意した。
37）a ［自己破産のほかの方法］はない。
　b　自己破産のほか、方法はない。
　c （方法について）自己破産のほかはない。

37a）は「ほか」の用法（Ⅲ）にあたり、37c）は（Ⅳ)aに頻出する主題化の類型、37b）は用法（Ⅳ)b・（Ⅴ）の両解釈が可能な類型である。本稿では、（Ⅳ)aを叙述名詞句として非存在文の付加句を構成するもの、（Ⅳ)bを遊離数量詞句、（Ⅴ)aを同格的な変更名詞句とした。西山2003の、時空間などの領域で、特定の指示対象（NP2）の断片を指示する名詞句は、これらを結ぶ特性をもつものとみることができる。この見方を、範疇的意味を示す形式名詞句に援用しつつ、その詳細を検討することにより、形式名詞・形式副詞、名詞由来の助詞・接辞の用法の分析に示唆するところは大きいであろう。

2.4. まとめ

以上見てきたように、「ほか」の諸用法は、（Ⅵ）をのぞいて名詞「ほか」の諸用法として、以下のように整理できる。これは、歴史／地理的な変化の過程とも並行的で、「そと」「よそ」に交替した（Ⅰ）、方言に限られる（Ⅵ）をのぞいて、共時的多機能をも説明するものである。

用法（Ⅰ）→空間・時間の範囲外；メタファー（Ⅱ）		指示的名詞句
→「範囲外」という値を表す名詞；（Ⅲ）	叙述名詞句	↑
→範囲外＋非存在文の類型；（Ⅳ)a	値名詞・尺度解釈	非指示的名詞句
→再分析；否定の作用域外；（Ⅳ)b	遊離数量詞段階	
→叙述文主語位置；集合操作；（Ⅴ)b／（Ⅴ)a	変項名詞句	↓

3. おわりに

本稿は、日本語の範囲外を表す名詞「ほか」を取り上げ、その歴史地理的な諸用法を概観し、形式化・文法変化の様相を整理するものである。

まず、「ほか」には、歴史地理的に（Ⅰ）範囲外の地点、（Ⅱ）範囲外の人・物、（Ⅲ）非指示的範

囲外、(Ⅳ)a［xよりほかに＋非存在述語］型の除外句、(Ⅳ)b［xよりほかφ―否定述語］の除外句、(Ⅴ) 累加句、(Ⅵ) 限定助詞といった用法が認められることを確認し、(Ⅰ)～(Ⅳ)a・b、(Ⅴ) までが構文上名詞の特徴を保持すること、(Ⅰ)(Ⅱ) は指示的名詞句、(Ⅲ)(Ⅳ)(Ⅴ) は非指示的名詞句 (より詳しくは (Ⅲ) 叙述名詞句、(Ⅳ)a・b値名詞から尺度名詞による遊離数量詞句、(Ⅴ) 同格句を構成する名詞句 (変項名詞句)) として形式化したものと認められることを確認した。

「ほか」の用法のうち、完全に機能語化（接辞化）が認められるのは助詞「しか」と同じ構文的振る舞いを示す（Ⅵ）のみである。(Ⅳ)aとbの違いについては、歴史的に否定述語文における否定の作用域外としての再分析によって「ほか」句の統語的位置づけがいわゆる叙述文の主語位置（指定部）へ拡張したとの説（宮地2007a、片岡・宮地2009）がある。これに従えば、(Ⅳ)(Ⅴ) についても非指示的名詞句の統語的位置の違いによる機能拡張の結果発現した用法と理解できる。日本語においてこの叙述文の指定部位置の句を構成するのは古来（係）助詞であり、名詞として保持する制約を解除する環境さえ整えば、助詞としての機能分化の土壌は (Ⅳ)bの確立によって構造的に用意されているといえる。ゆえに方言によっては（Ⅵ）の限定の助詞用法への文法化を果たしたと考えられる。

「ほか」の多様性は名詞という範疇の多様性と、連動する統語的位置づけに条件付けられ名詞の多機能として把握することができる。名詞として保持する制約（例えば名詞に後続する場合の「の」の必要性）が何らかの理由で解除されない限りは、あくまで名詞としての一用法にとどまるものともいえる。もちろんたとえ名詞のバリエーションとして把握できるとしても、統語的位置づけや機能がことなれば記述の分類においては別のカテゴリーを立てた説明も可能であるが、立場や目的によってその正否や用不用は異なる。本稿では「ほか」の多様性、日本語史上の名詞の体系的文法変化といった日本語の動態を支える構造に関心をおき、「名詞」という範疇からの整理を試みた。「名詞」「非存在文」といった普遍の道具立てと個別の言語要素の特性や制約によって動態を説明するものである。本稿の整理の妥当性、名詞の中での多様性を獲得していく条件等については、他の形式の観察や、歴史・地理的データの精査、言語外的要因を考慮に入れるなどによって補強していきたい。今後の課題とする。

＜参考文献＞

井手至「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法３』明治書院，1967 p.41.

片岡喜代子・宮地朝子（2009）「日本語の「とりたて」と叙述，その構造条件」日本言語学会第139回発表予稿集，2009年11月28-29日.

江口正（2000）「「ほか」の２用法について」『愛知県立大学外国語学部紀要』32（言語・文学編），pp.291-310.

江口正（2002）「遊離数量詞の関係節化」『福岡大学人文論叢』33(4), pp.2147-2167.

江口正（2007）「形式名詞から形式副詞・取り立て詞へ ―― 遊離数量詞構文との関連から」青木博史編『日本語の構文変化と文法化』ひつじ書房，pp.32-64.

角道正佳（1984）「「ほかの」・「ほかに」・「以外の」・「以外に」」『日本語・日本文化』12, 大阪学国語大学留学生別科, pp.1-25.
衣畑智秀（2005）「副助詞ダニの意味と構造とその変化」『日本語文法』（5）1, pp.158-175.
西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論 ―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房.
西山佑司（2007）「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7（2）, pp.3-19.
宮地朝子（2007a）『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』ひつじ書房.
宮地朝子（2007b）「筈からハズへ，訳（分け）からワケへ ―名詞が文法化するとき―」『平成18年度名古屋大学文学研究科公開シンポジウム報告書「拡張し変容する「日本語」名古屋大学文学研究科, pp.3-16.
宮地朝子（2007c）「形式名詞の文法化 ―― 名詞句としての特性から見る」青木博史編『日本語の構文変化と文法化』ひつじ書房, pp1-31.
宮地朝子（印刷中ａ）「ダケの歴史的変化再考 ―― 形式名詞の文法化として」『日本語学の最前線』田島毓堂編，和泉書院, 2010年５月刊行予定, 全22頁.
宮地朝子（印刷中ｂ）「日本語否定文と文法化 ―― シカ類の変化と変異」,『否定と言語理論』加藤泰彦ほか編, 開拓社, 2010年６月刊行予定, 全23頁.

用例出典：原則として日本古典文学大系（岩波書店、検索には国文学研究資料館のテキストデータ・検索システムを利用）、『とはずがたり総索引』（笠間書院）、『大蔵虎明本狂言集の研究』（表現社）

※本稿は平成21年度科学研究費補助金若手研究（B）19720105による研究成果の一部である。

Abstract

Usage and Noun Phrase Diversity of the Japanese Particle "*Hoka*"

This paper examines the syntactic and semantic characteristics of one of the Japanese particles that derived from noun called "*hoka*". This particle has various historical and dialectal usages. The usages of the particle "*hoka*" is comprised of six categories as (1) Outside/different location, (2) The other thing or people (something else/somebody else), (3) A location other than the described location (indefinite), (4) a: Exceptional phrase in the form of "*x yori-hoka-ni*･･･NEG", (4) b: Exceptional phrase in the form of "*x yori-hoka*･･･NEG", (5) Additional phrase in the form of "*x yori-hoka*," (6) Focus particle as Negative Polarity Item. The above mentioned first five categories show syntactic characteristics while the categories of 3, 4, and 5 can be explained as formal nouns. In contrast the type (6) can be explained as particle NPI because of reanalysis in non-existential sentence. Usage of the article "*hoka*" in semantic functions of noun phrase has some differences depending on its grammatical position in a sentence. We can consider the usages of categories No 1 and 2 as Referential Noun; No 3, 4, and 5 as Non-referential Noun Phrase. Furthermore, the category No 3 can be described as predicate nominal; No 4 as Quantified Noun Phrases; and No 5 as Noun Phrases Involving a Variable (NPIV) (Nishiyama 2003). In conclusion various usage of the particle "*hoka*" can be explained by diversity of nominal and its syntactic position.